

## 2007年度外国人留学生入学試験「実技試験」「小論文」等の採点基準

学科・専攻	実技試験(芸術学科は小論文)	面接		
	狙い・意図、採点のポイント	狙い・意図、採点のポイント	小論文利用	実技試験作品利用
日本画	描写力、構成力を出題のねらいにし、描く力を見ました。出来た作品の内容で採点しました。	語学力(日本語)があるか。小論文の内容や実技試験の作品について質問し、採点のポイントにしました。		
油画	女性モデルにグリーンの上着とジーンズを着用してもらい、手には南国風の木工品を持ってもらいました。椅子はそれらの色と対比するよう橙色を選びました。ニュートラルな色彩の空間に配された原色使いのモチーフを、各自どのように解釈してイメージを広げて表現できたか、また形態や空間は正確か、色感や質感は豊かかなど、造形表現の基礎を総合的に試験しました。	受験生が自分なりの制作を模索しており、その方向が我々教員の理想とする教育と一致しているかという点にあります。また各自の大学入学後のビジョンはあるか、どのような意図を持って制作しているか、多摩美を選んだ理由が明確かどうかなどを問い、採点の基準としました。		
版画	基本的なデッサン能力と、イメージ力および3時間で表現する力を見て判断しました。	日本語の能力を試します。日本語で本人の実技試験の具体的な内容を質問し、それに日本語でどの程度理解しているかを試しました。本学を希望したことを日本語で質疑応答の中で本学の授業に対応できるか否かを判断しました。		
工芸	基礎的描写力は、まず身につけてほしい。描写する事は、自分の目を頭脳を介しての行為。その人のエネルギーや喜びが伝わってくる作品を期待したい。構図、立体認識、物質感、配色などを総合的に判断します。	面接では、まず、なぜ本学を選び、何を学びたいのか、熱意があり説得力のある答えがほしい。実技試験を介し、感想を話してもらうことで、本人の制作姿勢を再認識したい。面接(小論文も参考)全般を通して、学業を達成するために必要な日本語能力があるのかも含め判断します。		
グラフィックデザイン	出題のねらいは、デザイナーとしてビジュアルコミュニケーション効果を生み出すために必要なデッサン力を求めています。それには、創作の原点ともなる観察力、そこから生まれる発見やひらめきなどを描けるのかを問います。	面接試験のねらいは、日常会話および授業に出てくる専門用語が理解できるかの把握とともに、授業への取り組みの意欲を把握します。そして、作品・ポートフォリオによって基礎的な造形力の評価を行います。		
プロダクトデザイン	モチーフ(透明グラス)に自由にデザインしたハンドルを加え、鉛筆デッサンする課題を出題しました。出題のねらいは、モチーフの形や構造を正確に描けるか、色や質感が表現できるか、独創的で理にかなったデザインができるか、その表現力があるかを見ます。それらの完成度が採点のポイントになっています。	面接では、しっかりと自分の考えを伝えられるか、学習目標は明確かが採点のポイントになっています。		—
テキスタイルデザイン	テキスタイルデザインを学ぶために必要な基礎的観察力と色彩表現力を問うことをねらいとして出題しました。設問を正しく理解しているかどうか、独創的かつ調和的な構成が丁寧できているかどうかを採点のポイントとしました。	ひとつは、授業についていくことが出来る十分な日本語力を有しているかどうかを問うために、もうひとつは、テキスタイルデザインを学ぶための意志や志願の動機を明確に説明できるかどうかを問うことをねらいとして面接試験を実施しました。また、共通の小論文は日本語の記述力を見るために参考にしました。		—
環境デザイン	環境デザインを学ぶ上で最低限必要な基礎的デッサン力があるか。形、空間を把握し、平面上に表現する力があるか。	本学科の授業を理解できるだけの日本語能力があるか。日本で、また本学科で環境デザインを学ぶ意欲、目的意識がはっきりしているか。デッサン以外のデザイン力をポートフォリオによって評価。		
情報デザイン	出題文と写真から与えられた「言葉」と「視覚」の情報を、どのようにとらえて、独創性のあるイメージを展開させるかを問う問題。限られた場面のなかでいかにして奥深い世界を感じさせることができるか、効果的な演出力が問われます。また、描画力、色彩感覚、構成能力などのビジュアル表現では欠かせない技術力も、採点のポイントになります。技術とアートの融合を目指す情報デザイン学科では、豊かな発想と、それを的確に伝達する技術をあわせもった創造的な人材を求めています。	志望の動機や入学後の計画などの質問を通じて、情報デザイン学科であつかう分野への印象や見識を聞きました。情報デザインの分野は、まだまだ未知な分野であることが多いですが、面接を通して受験生と直接会話することによって、本人の意欲や決心をうかがい知ることが出来ます。実技試験、小論文ともに面接開始前に受験生の志向性を知るための基礎資料として参照しています。		
芸術	知識量より、まず日本語の習熟度をみます。また論述の着眼点が出題内容に対して的確であるか、論旨は明確で説得力があるか、という点も判断基準となります。常識的、表面的にまとめあげた文章より、テーマに深く踏み込んだ内容の方が好ましいと考えます。	受験生の日本語能力が十分であるか、芸術に関する最低限の基礎知識を持っているか、芸術学科で勉学を進めていくだけの知的能力を持っているか、を判定します。外国人留学生の存在は他の学生にとっても大きな刺激となるので、人柄も選考の一つの要件となります。		

## 全学科共通小論文

基本的な日本語の能力を文の構成などによって判断します。  
 美術・デザインに対する興味・関心の高さを文章表現上のテーマの選び方から判断します。  
 大学における教養教育を修得する上で、基礎的な能力を幅広く有するかを文章上から判断します。